

徴用作家の作品が語るもの

——中村地平「支那娘ジン」について——

阮 文 雅

はじめに

昭和十六年（一九四二）十一月、中村地平は「報道班員」の一人として南洋に派遣され、昭南（現シンガポール）に一年間滞在した後、十七年（一九四二）十二月に帰国した。

これまでの中村地平研究が指摘してきたところによると、彼の戦前期の作品は、南方文学の樹立を疾呼し、植民地台湾を描いたものが多いとされるが、それに対して、戦後期は、作風が転換し、私小説風の小説を執筆するようになったとされている。②ただ、戦時期の作品については、『中村地平全集』③に一つも収録されていないという事情もあってか、これまであまり注目されてこなかったように思われる。

それは、戦後しばらくの間、戦争にかかわるものが一般的に忌避されていたことと、南洋派遣時期の戦時下の作品が決して多いとは言えないという事実が影響しているのかもしれない。

ないが、昭和十九年（一九四四）の時点で、地平本人もすでに「現地地執筆した作品の数が比較的に少ない」と述べており、「帰還作家の中でも、僕は最も仕事をしなかった一人にちがいない」と回顧している。

その中でわれわれの注目を引くのは、それに先立つ昭和十八年（一九四三）七月発表の随筆の中で、戦地体験を素材にした作家活動について、彼が次のような決意を示していることである。

そして、さういふ観点から、僕は現在マライに住む現地人たちが、どんなことを考へ、どんな風に生きてゐるか、それを作品に書き、日本内地の人たちに向かふの真情を知つて貰ひ、大変迂遠な方法ではあるが、自分の責めをいくらかでも果してゆきたいと、さういふふうに着てゐるところです。さういふ仕事なら自分の性に合つてゐるし、また

楽しい気持ちで（といふ意味は、自分に対して必ずしも不誠実ではなく）やつてゆけさうな気がするのです。⁵

この随筆の発表時期に注目してみると、それが「支那娘ジン」の執筆に取りかかる時期とほぼ重なっていることがわかる。それは、昭和十八年十一月に出版した『船出の心』のあとがきで「巻末の『支那娘ジン』はマライ帰還後の作品で、謂はば最近作である」と述べられていることから明らかである。すなわち、「支那娘ジン」は、さまざまな時代的制約の下に置かれていながらも、内地の読者に、植民地の現実を伝えようとする中村地平の決意を含んだ作品と言えるのである。このことから、微用経験にもとづいて戦時下に発表された「支那娘ジン」という作品を検討することは、「微用作家」中村地平の戦時下における植民地認識を追究する上で重要な意味を持つものになると思われる。同時に、それは「明るさ」、「南方」、「異国趣味」をキーワードに語られがちな「南方文学作家」中村地平の新たな作家像を検討するものにもなるであらう。

一 「支那娘ジン」に見る植民者

「支那娘ジン」は、昭南を舞台とし、映画配給会社の社員

として赴任したばかりの日本人、西田を主人公とする小説である。そして、現地で知り合った香港大学出身の映画業者、阿六と、阿六の事務所で働く女性、ジンをその中心人物としている。

作品は、西田とその同僚の宮本が「阿六」から豪勢な招待を受けている宴席の場面から始まる。そこで西田ははじめて小説の主要人物、「支那娘⁶」のジンを見る。それから、西田は何回かジンと会い、ジンが未婚の娘ではなく、子連れの内亡人だと分かる。小説はこのように西田とジンをめぐる二、三の出来事を描写しつつ展開していく。

作品のクライマックスは、ある日、西田と宮本が、阿六や阿六の友人、そしてジンを誘い、すき焼きを食べに行く場面である。そこでは、皆で酒を飲みながら盛り上がり、天皇に忠誠を誓ったりする場面もある。そして、ジンもテンションが上がって、媚を売るように西田の耳元に呟いたりして、西田はすっかり酔っぱらってしまう。ところが、しばらくして酔いが醒めた西田が料理店の庭に出てみると、ジンが一人で号泣している姿を目にする。

この作品は、ジンが日本との戦争で亡くなった夫の名を叫びながら泣く、というシーンで終わる。ジンの涙は、最愛のイギリス人の夫を戦争で失った悲しみを意味している。この最後のシーンでは、「子供か獣のやうな哀れな声」をあげ、

「しきりにかきくどいてゐる」ジンの泣き崩れた姿を前に、西田はなぜかただ「ズボンのポケットに両手をつつこんだまま」「黙って」見下ろしているのである。ジンの涙をみた西田の胸中は、作品の中では描かれていない。

本稿は、植民者西田が被植民者ジンに対してどのような眼差しを向けているのかを探ることによって、一人の徴用作家が帝国、及び戦争というものに対してどのような思いを抱いていたのかを、まさにその戦時下に書かれた作品を通して明らかにすることを目指している。

1 被植民者の女性

西田は最初から、ジンに特別な興味を感じている。小説冒頭の一行目から、「まるで抗日女学生の感じぢやないか」と、宮本と西田は阿六に招待された宴席の上でジンのことを議論しているのである。

町娘としては、四肢が延びきつてゐて、体が緊つてゐる。そして、体の動きが知的なのだ。けれど、普通の女学生と考へると、あどけなさが無さすぎる。

ジンの外見から、普通の女性と違う雰囲気を感じた西田は、宴会のホストである阿六が、日本の「コオ・プロスペリテ

イ・オヴ・ザ・イースト」の話をしている最中でも、ジンのことが気になってしょうがない。そして、ドアの蔭からジンが自分たちを覗きこんでいることに気付く。

なにか特別な興味を自分に——いや日本人に抱いてゐるにちがひない。西田は大きな眼で、まるで睨み返しでもするもののやうに、娘の方を見つめた。間もなくドアの隙間は静かに塞がった。

西田は、ジンが日本人に特別な興味を抱いていると思つている。それはジンの「自分たち日本人を見る眼もどことはなしに只ではない。意味のある感じ」がするからである。しかし、後にジンが自分から打ち明けたやうに、日本人とはじめて会うとき、ジンは「とてもこはかつた」のである。ジンの心には日本人を警戒する理由もある。それは自分のイギリス人の夫が、日本との戦争で戦死したからである。彼女には、「抗目的」な理由は十分ある。

「さあ、前にはここにはあんな娘はゐなかつたんだが……。つい近頃ボーイ代りに雇つたんだらうが……。気になるか」「気になるね」

西田と宮本は声を合して笑つた。

西田は初対面の時から、ジンに何気なく惹かれ、抗日女生の氣質を意識して興味を抱いていた。宮本が西田に、ジンのボーイ代りの身分を説明した上で「気になるか」と聞いたとき、彼らは声を合わせて笑った。日本人のこの笑い声は、前掲引用文の「町娘にしては……」という描写に窺われる西田のジンの「身体」へ向けられたまなざしとの連続性から考えると、ジンの「女性」性に対して発せられたものだということがわかる。つまり、支配者の側に立つ男性が、被支配者の側の女性の「身体」に注目しながら議論する会話の裏には、その「身体」への支配権が暗示されているのである。ジンは性別上も政治上も支配権を握れない側であるのに対して、西田のような日本人男性は、植民地では絶対的な権力者であることも反映している。そして、西田は、ジンから直接聞いたわけでもないのに、ジンも「支配者」の自分に興味があるのではないかと思ひ込んでいる。ここには支配者の側に立つ者としての優越感が匂わされている。そして、この優越感に示されるように、作品の構造には、強者と弱者という区別、植民地の権力構図が組み込まれているのである。

2 被植民者の異民族

ジンと初めて会った翌日、西田は街の盛り場を歩いていた。熱帯的な空気に包まれ、雑多な異民族がいる植民地の雰囲気

に、西田は違和感を覚える。青い空は「目が痛いほど」晴れ渡って、通りに「潮臭い風」が吹き、「ドリアン」の匂ひや、印度人、マライ人、支那人などの体臭」を混ぜた空気の中、西田は「夢の中の一場面」を歩いているように感じる。このように負のニュアンスを含みつつ描かれた植民地で、西田は終始心を落ち着かせることはできなかった。それも、「半ばばかり前までは、さういふ町の、さういふ通りに佇む自分を想像したこともなかつただけに、現在自分のたつてゐる地位が」嘘のように西田は感じているからである。

しかし、植民地にいる異民族の体臭には嫌悪を覚えたものの、西田は植民地の女性には憧憬を感じる。偶然と「背のすらりとした支那娘が、片手をうちふりながらほほ笑みかけてゐる」で、「ハアロウ」と西田に挨拶する。ジンだった。

異民族が生活している街の臭みを感じている中で現れたジンの「幅のある声、颯爽」とした姿態、そして英語のあいさつなどが、彼女の「エキゾチック」な魅力を現している。さらに、作品の最後の宴席においても、ジンの南方民族としての魅力が描かれている。

その晩、ジンは上海ドレスと呼ばれてゐる長衫を着てきたが、その体の線のはつきりする服は、彼女の背が高く、緊つた体によく似合つてゐた。それに珍しく口紅を紅くつけ

てゐるのが、陽焼けしてゐる肌に魅力的であつた。

こうして、西田がジンに興味を感じたのは、彼女の服飾や外見に異民族としての魅力を感じたから、つまり、自分との異質性を強く意識させられたからであると語られる。これらのことは、植民者西田が、異民族に対して嫌悪と憧憬というアンビバレンスな感情を抱いていることを示すものである。

3 植民地の権力構図

「ひどい貧乏に育つてきた」ジンは、弱者の側に属しているが、同時に強い女性であるようにも描かれている。ジンは、阿六の事務所働いているが、そこは「食べさせて貰つた上に、毎月三十円」の給料を貰うという、「いまどき」少ない良い勤め口である。しかしある日、「西田になじんで」きたジンは、阿六の留守の時に、「西田にかけてゐるソファに腰を落し」、いきなり西田に「なにか仕事（ジョップ）はないでせうか」と聞いた。

日本人の顔さへみれば、仕事・仕事（ジョップ・ジョップ）といふ現地人には、昭南に来て間もない西田ももう早くも馴れてゐる。けれども、ジンの言ひ方があまりだしぬけだつたので、西田は思はず眉をひそめるやうな気もちになつた。

戦争の混乱がもたらした生活難から、現地の人には日本人を見た途端、仕事を求める。これはイギリス政府の代わりに現地を占領した日本人の支配者としての権力を示すことである。しかし、西田は容易に現地人の話に乗らない。それどころか、ジンの出し抜けな言ひ方に、西田は「眉をひそめるやうな気持」になる。それは、西田がただの映画会社の派遣社員で、おそらく現地の人に仕事を与える力がないという事情とも関係しているのかもしれないが、そのことはもちろん現地の人には知る由もない。

その後、ジンが阿六の所での仕事を辞めたいというのは、なにも経済的な打算によるものではなく、「阿六はとても享乐的」で「浮気旦那」なので、事務所にも「たくさんの女が遊びに」くるからだと言ひ、貞淑な一面を西田にみせる。また、自分のイギリス人のだんなが一度、白人女性と浮気したが、やっと自分と息子のそばに帰つてきたと思つたら、まもなく戦死してしまつたのだともいふ。

腕ぐみしたまま、西田は黙りこくつてジンの話を聞いてゐた。どこにでも転ろがつてゐる一途な女の行き方が、哀れに胸に触れてきたからである。

ジンの薄幸の運命を聞いて、西田は「哀れ」に思ったが、

相変わらず黙っていた。このような同情の気持ちは、正直に表に出されることのないまま、指導民族としての体裁のほうに取り繕われていくのである。

4 被植民者の強さ

ジンの仕事の要求に面して、西田は他の現地人に対する態度同様、頑なな姿勢を取った。このジンの出し抜けた要求は、西田との間に存在する支配者と被支配者の上下関係を顕在化させた。しかし、支配者と被支配者の構図から西田とジンを解放したきっかけは、ジンの子供であった。客間の気まぐずい雰囲気の中へジンの子どもが「ころぶやうに部屋の中に駆け込んで」入ってきたからである。

ジンはその子供を無雑作にまるでひつつかみでもするやうに抱きかかへると、ソファへと連れてきた。そして、西田の顔の前につきだしてみせた。

「あたしの可愛い、可愛い息子」

仕事（ジョップ）の話題から開放されたことに、西田はほつとしながら、皮肉さうに言った。

ジンの子どもは「色の白い、四つくらゐの、お河童にした」「無邪気な男の子」である。初めて市場で会った時に、西田

は思わず自分の内地に残した子ども「太吉」と「声を出してつぶやくところ」であった。それから、西田はこの子を見るたびに、「太吉」の身代わりとして見てしまふようになる。

自分の見つめる西田の顔が、子供好きであることを、幼児の敏感さで受けとると、ジンの息子はとつぜん癩だかい声で叫んだ。「ペアペア！」苦笑しながら、西田はジンの手から子供を受けとつた。まるで小さな生きものからでも感じるやうな柔かい、暖かい感触が指の先から、体全体へとしみわたるやうに伝つてくる。太吉の感触を想ひだし、西田は危く涙があふれさうな感じになつた。

しかも、作品では一貫して西田の顔色をうかがうような言動のジンが、子供のしついでいきなり母親としての強さを現したのである。子供の少しのいたざらで、ジンは「支那語でもつてなにか大声にわめき叱りながら、お尻をひつぽたきはじめ」た。子供の泣き声と、「無惨な平手打ちの音」を聞いていられなくて、西田はジンをやめさせようとした。「そんな滅茶な……、乱暴はよさないか」と言ったが、ジンは「ひとの子を甘やかして、台無しに（スポイル）にするのはよしで頂戴」と邪慳に答えた。さらに、「激しい燃えるやうな眼をし、こんどは子供の泣き声をやめさせるために、その頬ペ

たをぶちはじめた」。こうして、「日本の婦人では、とても耐へることのできさうにもない激しい折檻」に、西田は完全に圧倒されたのである。子供を躡る時に現した、未亡人としてのこの内面の強さに感心したものの、それと同時に、「あつげにとられてゐた」。そして、「子供の泣き声がさまると」、ジンは「けろりとした顔で」「いい子(ナイスボーイ)でせう」、「この子大きくなつたら、日本で映画俳優にしたいわ、そのときはお世話してくださいな」と西田に頼んだのである。

自分の夫を殺した民族にもかかわらず、ジンは、自分と息子の未来のために日本人に腰を低くして仕事を頼んだ。そこにはジンのたくましが語られている。被植民者として、ジンは明らかに弱者の側にいるのだが、居場所を失い、憂鬱な毎日を経過す西田よりもはるかに強靱な一面も見せるのである。

二 「支出娘ジン」に見る植民者

1 距離を置いた姿勢

西田は、ジンの「いかにも熱帯地の人間らしく、気象のはげしい、そして変りやすい」性格に「あつけにとられ」ながら、しばしば「苦笑」を見せる。このように、西田は、被植民者ジンに対して憧れの眼差しを投じると同時に、一歩引いてしまうようなところも見せるのである。

それから、ジンは自分の身の上を打ち明け、イギリス人の夫に一度捨てられても、心の中で彼の愛を信じていることを西田に話した。しかし、ただ「腕ぐみしたまま、西田は黙りこくつてジンの話を聞いてゐた」。作品の随所に点在する、この西田の「腕ぐみ」しながら黙り込む姿勢は、一種の拒絶のシンボルである。

無表情な顔をして黙りこんでゐる西田に気がつくのと、とたんにジンは慌てふためいてしまつた。

「あら、日本人のあなたに、こんなことお話しして、悪かつたかしら……。あたしうつかりしてゐて……」
刑事にでもつけねらはれてゐるやうに、ジンは脅えた眼で辺りをキョトキョトと見まはした。

「あたし罰せられやしないかしら……」
落ちついた、ゆつくりした口調で西田は答へた。

「君を罰するほど、日本人はそんなにケチぢやない……。だけど、戦争前のそんな白人に対する考へ方はもう変へなくちやいけないね」

この会話から見られるように、西田は指導民族としての立場を自覚している。そして、常にこの立場にふさわしいやうに現地の人に接している。内心では現地人の仕事の要求に困

り、気まずく感じているにもかかわらず、その弱さは決して表に出すことはなく、「落ちついた、ゆつくりした」口調で、まるで日本人を代表しているかのようには訓示的に発言する。

また、西田は他の植民地での作中人物との会話においても、しばしば「黙り込んでゐる」姿勢を取り、気まずい気分をもたらす。阿六との宴席の上で、阿六が華僑としての自分の意見を話した際にも、西田は一言も口にしなかった。「阿六は香港大学を出た知識人といふことだ。さういふ連中がマライの新政について、いつたいどういふことを考へてゐるのか、黙つて聞いてゐてやれ、さういふつもりで、西田は言葉をはさむことはせず、黙つて相手の言葉に耳を傾けてゐた」からである。ところが、彼の「黙り込んでゐる」姿勢によつて、支配者としての西田の植民地での警戒心と指導者の体裁が作中において浮き彫りにされているのである。すなわち、この黙り込む姿勢と苦笑いとは、西田と現地人との間に立てられた無形の壁ともいえるのであり、植民地における人間の人の種、階級の差異が表象されている。

2 指導民族としての体裁

小説の構成から見れば、西田と、被植民者、マライの華僑、「阿六」たちとの二回の宴席は、小説の冒頭と結末に配置されておき、大きな意味をなしている。このため、一見すると、

現地の日本人と「支那人」の友好関係が、小説の大きな主題になつてゐるかのようには描かれてゐる。たとえば、次の引用のように、最後の宴席ではしゃいで熱くなつた雰囲気の中で日本人と「支那人」との無形の壁が取り除かれたような情景が描かれてゐる。

楽しい雰囲気に有頂天になつてゐるが、間もなく感動に耐へきれなくなつたやうに、阿六はだしぬけにすつくと起ちあがつた。そして、体をこはばらせ、厳かな顔をして言つた。

「日本の政府と天皇陛下に忠誠を尽すことを誓ひます」

阿六がこうして、酒の勢いで天皇への忠誠を誓つた後、「支那人」は皆阿六にならない、「自発的におなじい宣誓をして行つた」。

現地人を愛し、現地人に愛され、一生を終つた無名の日本人として、その土地に朽ちることも、遠い将来の日本のためには、なんらかの意義があるにちがひない、ほんやりに西田はさういふことを考へてゐたのである。

自分たち日本人におもねる現地民族を前に、西田は思わず、

「これらの現地人たちと混つて、一生をその熱い土地で過す自分を空想してゐた」。しかし、この夢想も、自分と家族のためを思つてのことではなく、「遠い将来の日本のために」「意義がある」ことと思つてのことである。そしてこのことは、「日本人」という支配者として立場を与えられてしまつた西田という一個人の存在意義が、実際には極めて小さいものであるということを示唆してもいるのである。

3 被植民者との距離

酒を飲んだ後、阿六に「なにかわけのわからないことを言はれながら抱きつかれた」など、阿六との親密な関係を強調するような描写がある。しかしながら、西田は阿六の天皇に忠誠を示す様子を見て、ただ「新しい権力者(?)」である日本人と、こんなに早く、これほど打ちとけた会合をもつことができようとは、阿六もまつたく予期してゐなかつたのであらう」と考えていた。西田は、自分たち日本人の権力者としての身分を意識し、阿六の自分に対する善意と好感を、「新しい権力者」に対するものと見破つてゐるかのようである。事実、西田は阿六とのつきあいにおいて「他のどの現地人に接するよりか、マライの民心のほんとの動向を汲みとることができ、さういふことも西田のやうな職業に在る人間には、たいへん便利」だと捉えている。

阿六が植民地にいる支那人を代表しているように、阿六の友達も阿六と同じ考え方を持つてゐる人々である。戦争の後に新しくできた日本料理店で西田と宮本が開いた宴会で、被植民者は日本文化を少しも理解していないのに、騒ぎ立てるシーンが描写されている。

もとは敵産であつた洋館の一室にアンペラを敷き、床の間をつくり、生花を飾り、安っぽい日本趣味を横溢させてゐた。けれど、このごろのマライの一般知識人の風潮で、日本知識を得ることに熱心な来客たちは、その雰囲気で大よろこびであつた。頓狂な声をあげながら、窮屈さうに座布団の上に坐り、床の間を指さして、「オー、イケバナ、イケバナ」近頃なにかの本で読んだばかりの知識をひけらかして騒ぎ立てた。

この描写からも、西田を「苦笑い」させるものが読み取れる。被植民者が日本文化を追いかけけるさまを見て、西田はこれを権力転換の結果だと捉えている。自分たち日本人に対する、現地人の好意にあふれる言動を、西田は冷静な目で見てゐるのである。

ところが、宴会でエスカレートしていくその雰囲気は、西田の酒が醒めた頃、意外な結末を迎える。西田は眼が覚めて

庭へ出ると、ベンチの上に蹲っている「黒い影」に気付いた。

「ジョン、あなたはどこにあるの……。マライはすっかり
変つてしまつたわ」

呂律のまはらない、まるで子供か獣のやうな哀れな声で、
ジンはしきりにかきくどいてゐる。

「あなたはそんなこと、なにも知らないわねえ……。でも仕
方がないわ……。ジョン、東はやつぱり東だつたのねえ」

こうして、さつきまで宴会で西田と見つめ合つたりして、
西田に植民地での未来を想像させたジンは、夫の死による不
幸とマライの移りゆく運命とを思つて悲しみ泣きくずれる。
ジンの涙には、戦争によつて最愛の夫を失つたことで不幸に
落ちた自分の運命に対する悲哀と、被植民者として新しい権
力者に迎合しなければならぬ無力感という二重の意味が与
えられているのである。

ほんのわずか前には、前述したようにジンとの未来を夢見
た西田だが、ただ「ズボンのポケットに両手をつつこんだま
ま」、「黙つてその黒い影を見おろしてゐた」。一見唐突な結
末ではあるが、西田の「黙つて」ジンを見おろしている姿勢
は、作中では冒頭から一貫して存在している。

4 被植民者との同質性

現地人の上位に立っている支配者としての西田も、被植民
者であるジンと同様に戦争に対する虚無感を感じている。そ
もそも彼は、理想を持つて植民地に来たものではなかつた。

阿六の事務所から初めて食事の招待を受けた時、「卓子の
上にいつぱい、はみ出るぐらゐ並べてある鶏や牛の肉」を見
て、西田は「視線を移し」て「ああ、この肉の一片でも太吉
に食べさせてやるのができたら……。太吉は内地の祖母の
許で食べ物に不自由してゐるだらうに」と内地にいる子供の
ことを考えた。日本内地は当時、戦争で食べ物に困っている
状態にある。しかし、この状況は当然、日本人を上位に迎え
る人々に知らせることはできない。

西田も、妻に死なれて、人生の悲哀を体験した一人である。
不幸な運命や内地の物資の不自由な状況から逃げ出そうとす
るため、西田は植民地に赴く道を選んだ。

なに一つ幸せな思ひをさせてやることなしに、妻を死なさ
せてしまつた、その後味のわるさが、澀のやうに心によど
んでゐたのである。その上、那加子が残した幼い子供を、
男の手一つで育てる煩はしさに、物質が不自由になつたこ
の頃では、ますます耐へられなくなつてきた。

西田は、自分の不幸な運命から脱出し、「新しくなった」世界を探すために来た。戦争によって「昔のことはあたたかちにとつてなにもかも御破算なんですもの」というジンの言葉に、西田は心の中で同感するのである。西田もジンに劣らず無力感を抱え込んでいたのである。妻に死なれて気もちが救われないうちに、内地生活をご破算にしようとして昭南に来たとはいえ、この南方的な植民地の町を歩いていても、西田は「なんだか、見残した夢のなかの、一場面でも歩いてゐる」ような気もちになる。しかしながら、ジンの口から彼女の運命を聞いた後、西田はジンの前では「無表情な顔をして黙り込こ」むしかなかった。

きびしい戦争の現実の前には、ひとり支那娘の人生など些末なことだといふ考へも、同時に彼の腹の底には湧いてゐた。現地に来て以来、それに似た人生風景がいくたびか西田の心象に映り、そして泡沫のやうに消えて行つたことか。

この心の底からの嘆きは、西田が戦争によって不幸になつたジンの人生に同情を寄せながら、自分の不幸な人生も投影しているようでもある。したがって、西田はジンの不幸な境遇を聞いて、自分の境遇を思い起す。戦争で人生を狂わされた人々とは、自分自身だけを指すのではなく、植民地の人

間にも当てはまるのである。

しかし、支配者としての地位に立つて、彼は自分の境遇をさらけ出し、本音を吐露するどころか、被植民者への同情や同感を示すことも容易にはできず、植民地に溶け込めないままの毎日を過ごしているのである。植民者の地位に否応なく置かれた西田の虚無感と無力感に溢れる不幸は、西田の「ズボンのポケットに両手をつつこんだまま」あるいは「腕組みしたまま」の拒絶的な姿勢と、現地人に対する沈黙とに、象徴されている。

おわりに

作品では、支那娘ジンの薄幸な運命が、西田の眼を借りて描き出されている。彼女の不幸は日本軍がもたらしたものである。彼女のイギリス人の夫は日本との戦争で亡くなった。この作品の主軸の一つは、ジンの不幸な運命である。他方で、もう一つの主軸となつているのは、西田の植民地での拒絶姿勢が物語る、植民者の不幸な運命である。地平はこの作品で、きびしい戦争の現実を示す一方、被植民者にたとえ同情してもその感情を明白に吐露できない支配者、という板ばさみの立場を描き出し得た。この植民者と被植民者の苦悩の双方を描くやり方は、戦地に派遣された地平だからこそ可能になつ

た方法、だと言える。

徴用作家は、銃後の民衆の期待を背負って戦地に赴いた。女流作家 真杉静枝は、戦地に赴いた地平にあてて「中村地平様」という随筆を発表した。昭和十六年十二月八日の開戦日のことに触れながら、次のように書いている。

そのほか、いろいろの場所や、乗ものの混雑の中でも、人々の、いつ死んでも惜しくは無いというほどに、純化されきっている魂が、互いの心を、泣きたいほど勇気づけあっているようでございました。日本人の良さが、こんどばかりははつきりと確かめられたように思います。(略)こう述べたてましても、そんな意味の偉大さでは、現地のあなたは、もつと、どんなにか大きなものを踏み越えなさいましたわけでございますね。⁷⁾

この文章が示すように、当時、内地の戦争の描き方は、勇気、希望、純潔など、戦争の美しさや国のために犠牲になることの偉大さを強調した言説と同調したものが多かった。真杉から地平への期待は、銃後の大衆の徴用作家に対する目との同質性がある。

しかし、「支那娘ジン」に描き出された中心軸は、暗い植民地の現実面、いわば植民地の憂鬱であった。したがって、

「支那娘ジン」は徴用作家のプロバガンダの役割を十分に果たしたと言ひ難い作品である。

それでは、中村地平は一体どのような考えを抱いて徴用作家として戦地に向かったのであろうか。大阪からサイゴンまでの輸送船の上で、彼はすっかり心の安定性をなくし、すでにノイローゼ状態に陥ったかのようになっていた。ともに徴用作家として南方へ向かった井伏鱒二は、その頃のことを次のように回想している。⁸⁾

：徴用で南方へ行く輸送船のなかでは、とめどもなく鼻汁を流して大声で泣き叫んだ。「井伏さん、井伏さん……」と私を呼んで、「助けてくれ。海へ飛び込みそうだ。僕を縛って下さい。早く早く。縛ってくれなければ、飛び込んでしまう。」

そこで、泣き喚く地平を板に縛り付けて船室に運んだと回想している。さらに、マレーの報道班第二部隊に属した神保光太郎は、シンガポールに上陸し地平と久しぶりに出会った際のことをこう回想している。⁹⁾

あのやさしいひとみでじっと私をみつめていた彼が私にむ

かつて、「ねえ。神保光太郎が今度の部隊に居ることは、こちらでも、早く話題にのぼっていたのだ。そして、彼もすっかり傷つくだろうなどとうわさしていたところだ。」
と言い、それから暫く、黙っていたが、思いつめたように、「ねえ。一度死ぬのだ。死んで生きて行くより道はない。」
とぼつんと言った。

この「一度死ぬのだ。死んで生きて行くより道はない」という地平の言葉は、紛れもなく、現実の戦争体験の中ですっかり傷ついた彼の苦痛を表すものである。それだけ苦痛は深かったのであり、生きていくために毎日死ぬ覚悟でいなければならなかったのである。

しかも、作品における西田の認識と同様に、地平は占領地での権力構造を自覚していた。

今回想してみると、現地人との接触面に於て、馬來に於ける僕自身の存在が、本質の自分よりかはるかに過大であった、日本内地に帰つてみれば、そんなに大きな自分など、どこにも見出すことはできない、そのことに妙な、照れくさい、気恥しさを感じます。¹⁰

地平は、当地で感じたことを、帰還後に「支那娘ジン」の

西田に託しながら表現したのである。そもそも、作品公表時の昭和十八年には、時代的制約の下で、自らのうちにあるさまざまな感情も韜晦した形で控えめに表現するしかなかったが、この作品は、内地の期待と徴用作家の思い——少なくとも中村地平の思い——とが大いに乖離していることをわれわれにうたえていいる。

一方で、植民地の権力構図の中に陥る植民者と被植民者のそれぞれの異なる立場を同時に描き出すことによって、地平は、厳しい戦争の現実の前に感じた無力感と、植民地／内地を問わず人々が「不幸」に陥っていることへの憐れみとを表そうとしたのではなからうか。

さらに、「支那娘ジン」においては、中村地平がそれまで憧憬の対象として描いてきた植民者女性像とは異なる、文明と野性の両極、すなわち内地と植民地台湾の枠から逸脱する女性像が表現されている。本作品において、中村地平は「南方」の舞台を南洋へと移した。舞台が変わっても、従来の作品のように、植民者である主人公が植民地女性へ送る視線は依然としてやや官能的で憧憬的である。だが、「支那娘ジン」で描いた植民者女性も野性にも属さず、抗日的な理由が十分あっても、親日的な態度を取らざるを得ない複雑な心境を有するものとして描かれ、光のようなイメージから、「黒い影」のイメージへと変化していく。そして、植民地の

女性の不幸と暗い心理の葛藤を語ることによって、明るさ、楽天性、素朴さを象徴する「南方」のステレオタイプからも脱した。中村地平は戦後、植民地を描く南方文学を断筆した上、作風が私小説風に大いに傾斜したと言われる。この作品は、中村地平の南方女性描写の転換点に位置づけられると同時に、終戦よりも一段早く、中村地平が自分の「戦後」を迎えたことを示した作品でもあるのである。

註

- (1) 微用作家の目的について、『新生南方記』（日本文学報国会、一九四四年三月）によると、「各作家の現地に於る日常の見聞を語りつつその間おのずから我が南方建設の着々たる進捗状況と原住民の協力ぶりを感ぜしめ、敵国民をして秘かに我が実力を畏怖するの念を懐かしめることを主眼としている」とある。
- (2) 長嶺宏『中村地平』（逍遙・鳴外論考）風間書房、一九七五年八月。
- (3) 中村地平没後の一九七一年二月、七月、皆美社より出版。三巻。
- (4) 昭和十九年出版の単行本『マライの人たち』の後記より。
- (5) 中村地平「時評的感想」（『新潮』、一九四三年七月）。
- (6) 「支那」という用語は、現在は、中国人に対する差別用語として忌避されているが、本文中では当時の用語として、括弧を附してそのまま「支那」と表記することとする。

- (7) 真杉静枝「中村地平様」（『文芸』、一九四二年三月）。
- (8) 井伏鱒二「南方はけの頃」（『井伏鱒二全集』第十二巻、筑摩書房、一九六八年一月）。
- (9) 神保光太郎「じへいさん」（『中村地平全集』第二巻月報、一九七一年四月）。
- (10) 中村地平「時評的感想」（『新潮』、一九四三年七月）。